高橋一
同高橋二

男禮

下

津田文庫
文庫 1
1529
2

早稲田大学図書

男禮下篇

饗應

ジョンソン先生乃說に。饗應乃時刻ハ開けたる世ゑ在りて。一晝夜乃中にも。いと重んぜべき時なりと云へり。隨ひてその禮方ハ。主客ともゑ麤忽なるべからぬ。さるゑ因りて。爰に饗應ゑ禮を示して。そゑ招待ゑ初より。客ゑ會釋して立去り。或ハ。暇乞もなさで歸りたる終りに及ぶなり。

饗應に禮數ゑ大小あるべ。ときに隨ひて。そゑ日數二日より。乃至半月までゑ間に招待狀を前以

つだ文庫

010190606991

て遣はべし。招待狀は中よりも。當に饗應は主なる夫婦は名を連ねて認め。それ返書の上封にも。重に婦人の名當よいたはべきことなりとぞ。

招待を受けたる客よりは返詞も。聊も延引をべからず。第一應否を明白に告げて。取り分差支もなければ。時刻を違はざるやう心懸るこそ肝要なれ。時刻の早きも過たるも。その遲きも過たるに同じく不都合千萬と知るべきなり。そも。家内に混雜を釀し。主人も未だ衣服を整へず。内室も猶ほ料理方は用意をなしたへありて。客間よも

1529-2

爐火を具へざるなど。皆時刻を早待たより生ずるなり。若し。事の不意も起りたるか。又はその身も心附ずして。時を早待ちたもば。不圖も過日の招待狀を見失ひしが。例刻の定は何時もやと聞たゝ。その席を立ち去りて。家内の混雜を憚かるべし。又時刻の遲きに過たるは。その不敬猶ほ大にしてなすべき樣もなし。先づ主人もたけて。膳具の鹽梅を害なひ。次も他客の待遠き心をも察せず。又その身も過を悔やるによりて。席もありても。始終心中の安からざることは甚だ多し。さ

るを因りて。此場に臨めば。程近き料理屋に居付き。使役もてその趣旨傳ふる故勝れりとは。斯くていは。不調法の申譯もなさで。麗末なる取扱を受げ。しして。饗應の手順を亂さゞることそよげれ。客にべて客間に至れば。相互に挨拶をなして。饗應の前に主客の語らひ注る話言は。淡くして重からず。晴雨寒暖などを述ぶるにたくなし。主人はその間に心を添へて。いと注とるく目立ゞやう。女客と男客の數に配り置きて請持となし注ゞば。饗應の席に臨みたる節。衆客皆その處を得て

安きなり。さあれば。中にも秀美なる婦人あるを。數人の男客一時に引連れ行かんとして打ち寄り。且注は。才色劣りたる婦女にも。やむこと得ざる餘り。己れに目づる男客に伴れて行かんとなし。或は我身に均しく殘し置きたる客に誘ひ至らんことを求むるなどの不作法なかるべし。

饗應の用意最早調ひるれば。主人坐を立ち客を請ひて食房に入らたむる時。亭主は先づ坐中の上席にある婦人を導き。内室は相當の男客に伴れて隨ひ行き。他の客人も最初分配せし如く。

各その請持の婦人と共に。順を亂さざして食房に至りぬ。

食房に入りある時。主人連れ來りし婦人に手近き坐を與へ。自分は椅子の後に立ちながら。他客殘らずその定坐に就くを待たべし。

それ。首尾よく饗應を勸め。何事も宜しき程を失さざるは。人間交際の一難事なれば。主人にてその勤を過不及なく仕成ひ者は絶えて稀なり。されば。客の話言食事をおひに心底打解けて遠慮なきやう取扱ふを第一として。物ごとをべて機

轉早く立廻り。その風儀ちとやかにて障りなく。粗世間の事情ふを通じて更ふ怪しむべきことなく。それ心ばせ實意深切なることを肝要なるべきからに。客に對して私情抱らず。人に向ひて矜る色なく。客の歡樂なひにまゝ。己の話言もてこれを奪ひ妨げず。應對は世話役の顔付なさやう慎むべ。その宜しき程は。烈しからず。偏らず。又坐中に遍ねき話言なて。内氣なる婦人なを慰さめ。無言の少年なを笑はせ。諸客一同の坐興を催さしむべし。この心得をもて饗應を全ふ

ることゝい難けれども。主人よりてこの心得おき時も。能く客扱取扱ふ者と云ふべからず。

客皆席に就ける後。食臺の端ふありはる人。その右手ふ積み重ねし汁皿に吸物扱盛り入れて分け配る節。客の好み如何おるやを問はず。又何の品とも告げずして先づ右手の客より左手の客に及ぼし。斯くおして。殘ふく吸物を配るおり。中ふも魚扱好む客ありて。吸物に望おければ。その汁皿を次に廻にべし。さもなど。汁魚とも二度に及びて求おることの許し難きは。他客空しく手扱

束ねて待つことのあるべおか。

若し。給仕人來りて肉を切るに臨めば。肉鉢は正しく食臺の上に列らねて後。ともを脇臺の上に取り去るべし。始終脇臺の上にはみ肉鉢を載せ置くは。さも料理屋に似て上品おらず。

主人自から肉を切る時は。客は好き嫌ひを問はで。その肉を給仕人に分け配りてこれを望める客は前に差置かしむべし。

食臺ふ載せたる肉の部分に。諸客の好き嫌ひあるべ。その望に任せて擇まふむるを良しとそ。さ

れど。主人より差圖をなさで。唯客の望ある部分
ハ。何をなれやと問ふのみふて。若し。望なけをば。
再たび問はず。又強ひて擇またむることをなし。
若し。主人。或は內室れ中。自ら肉を分け配るふ
値へば。直と請置くべし。ところを次ふ廻して傳ふ
るは。古風に於て交際の厚き禮なりと示せしが。
今樣ふてを成るべく外向の飾を省くふそ。その
殷勤に人ふ讓をるは。順を亂し且つ不都合にて。
開けをる古風の習なりし。如何にとあをば。讓ら
れたる客は。斯の如き過分の禮に當るを恐をて。

自ら再ふび推し却け。斯くて兩人とも相互ふ
會釋ふなせば。肉皿の置き所定らずして。肉は終
に冷ゆるに至て。折角の馳走も遠慮の爲ふ食ら
ふことを得ざをばなり。斯れ時。客の互ふ辭退ふ
ふれは。最早主人の定めたる席順ふ違へ。且つそ
の撰ふ戻れることそ。甚だ不敬ふて。猶ほ上坐の人
は。主人の設ふ受ざれることよりて。馳走乃手順ふ取
亂ひことと有りとせ。
饗應は。外向の飾ふ去て。實意もて取扱ふを專一
とふせば。食事ふ臨む時ふも。我前に置きたる肉

皿を見て。直ちに刀子(ナイフ)を把り。その外の道具を備へ
ざゝ。目前食事をおこなふことも。他客の食初まるを
待ぢして。その用意の心得あるべきなり。今にも
他客を待ちて食事をおこなふことゝ。唯田舍に多き
のみならず。亦場席をもつる人よりも少からず。
魚を食らふよゝ。專ら叉子を用ひて。刀子を使ハ
ぢ。叉子を右の手より把りて一切れの麵包を左ふ
摘まむを作法とぞ。又何品ふ限らず。切取らざし
て宜ちき品には。都て斯くなすべし。刀子もて食
品を口中に入るゝハ。禁ぢべきことなり。

次ふ居並びたる婦人にハ。折節氣を配りて。先づ
その望みたる品を與へ。ある後。自から構ふべし。
とゝぞ。その婦人の皿に始終目を懸けゝ。人の
食事を見張ることゝハ。反りて無禮なり。若し。大切
ものの肉ふて食らひかゝるを見れば。その方に向
ひて。何事を話し懸るやう心得べし。
食事ふ臨みてハ。一度に幾品も皿に盛ることな
し。唯一品の肉。一種の野菜をもつて。その限りとゝ。
ことに二品を食ひ終りて。他の肉を求むる節は。皿
を取改むべし。他の野菜なれば。取改むるには及

ばぞ

饗應の折料理を出ひ毎ふ主人ゐよりては。自からその鹽梅拔誇り。酒の氣味を評判して。客ゐ勸むる者あり。又ことゐ違ひて。始終料理の不鹽梅よして。客の口ゐ合ぞことを憂へ。或は料理人の拙きを口說く者あり。何ぞとも。その程拔得たりとは言ふべからぞ。こるに因りて。斯る時には。客の賞美に委ね。その味を知れる者の評判に任ひにたくおし。

珍味ありとも。强て客に勸めぞ。何品にても客の

望拔重ねて問はぞ。又無解に品拔盛り加ふべからぞ。推して食事を勸めるは。分けて無禮のことおれど。此風世俗には至て多き習ゐり。最早上にも示さる如く。そべて。客に底意ゐく。打解けさいるをもて。主人の心得とゐそべきに。始終强て勸むるハ。自然客主の間に隔拔生じて饗應の本意に戾ぞりとひ。

他客の食らひ終るまて。已ぞの皿拔取遣らぞ。刀又の類をも。棄て置くべからぞ。

臺布（クロース）を未だ取去らざる內。葡萄酒を飲むゐは。必

老人と共になるべきなり。そは酒を辭退するは。禮に非ずとなすものゆゑ。人と共に酒盃飲むに臨めば。相互に眼を守りて拜禮し。話言はなくて。唯情深き笑顔を現はしたのみ。

吸物を取去る後。家内の婦人に程近く居合はせたる人は。直にその婦人と共に葡萄酒を飲むに隨ひ。その他の客も各同時ふとの所作なるべし。若しこの禮を行ふ時。家内の婦人なかりせば。主人即席坐客の内より。婦人拔選みて。これに代ふるもなほ可なりとす。

三鞭酒を飲むは。初發れ臺布を取去る後を期とす。即ち肉食と後段との間なりとす。時に給仕人の盃を配り置くに隨ひて。餘の給仕人酒を盃に滿ぶ。客直にこれを飲み始むべし。時に因りて。斯の如き場合二度に及ぶことはあるも。三度に及ぶことはあらじ。又他客の前もあれば。時に後れて三鞭酒を求むべからず。

若し。家内に子供多くありぬるもの。主人そは煩しきを遠慮して。饗應の後にも連れ來らしめず。猶客より格別の所望ありとも。先づ一應の申譯

をおして呼出すゝ為みしるべ。又主人に追從せんとて子供を見まほしく言ふ者あり。さもぞ。客としていハ。他客の心をも斟酌して。混雜のおき爲め。子供を招かざるをよしとせ。

重立たる響應ハ。固より內間の響應なれ。客より給仕人ゑ話し合ふべからず。又他客ゑ向ひて給仕人の仕打を。彼此と言ふべからず。こゝ皆無禮の至なれば。この時ハ。唯聲を改めて己れの好める品を命じ置き。その品の我前ゑ至るを待ぢのみなり。

牛酪。鹽などを取るゑ。自分の刀子を用ひざるこゝハ。言ハずとも知るべし。さもぞ。若し。他客その皿を持ち來りて。手近き品を求むる節。速ゑ刀子を得ざれば。その客の刀子を借り用ひて。求めつる品を盛り遣そハ。その場の働ゑて。更ゑこゝを咎むるゑ及ばず。

二度目の臺布を取去る後。香水を入れたる手洗（フィンガーボール）ひ盌（グラス）を出せば。その中ゑ。輕く指を浸して。唇を濕ほし。布巾（ナプキン）ゑて拭ふべし。

果物。胡桃などを出せる節ハ。小皿（スモールプレート）一枚。葡萄酒（ワイングラス）猪口

二つ。皿布一つ。客毎に配り置くべし。林檎。桃。梨。蜜柑の類拔出せば。右の小皿に銀刃の刃子を添へべし。剛鐵刃の刃子を用ふれば。果物の汁にて。その刃色。忽ちに變ずる者ありとぞ。

坐中皆男客のみにて。話言乃序で。料理を評判する時にも。慎みてその席にあらざる品を褒むることなかれ。

氣高き主人の響應を請くる時。食臺に上る。價貴き品ありとも。さまで。これを大切に思はずして。乃家には珍らしからぬ品と見なしたゝ。隨意に取盡すべし。若し。斯樣なる品拔望まざる時は。最初より請けざるを勝れりとぞ。さもなくば。その品を取扱ふに及びては。さまで。珍重なる物と思はざる樣子もて扱ふべし。又生識りの習ひて殘り物を取盡すことを忌むまい及ばぬ。その代ふべき品は無らんことを痛く恐れるは。主人を輕んぜるに近し。さるよりて。まゝ殘り物を取盡すとも。主人を輕んぜるに較ぶれば。中道には非ざれども。猶ほ勝れりとぞ。

平素より男の守るべき。道なりとぞ。取分け響應

乃席とは。心中安らかなやう心得べし。又話言は麤忽なる發せづして。大切なる用事を務むるなり。氣分を沈めて。猶ほ平日乃事れ如くなるべけれど。物毎に少しも輕薄ならずして。その場乃威儀を保つべし。そべて。禮方を執り行ふとは。恰も禮を行なはざるが如くなして。別に工夫を費さず。天然無爲にてこれを勤むることなり。

饗應の席に在りける時。人によりては。獨りそれ身の尊敬を求めんが爲。他客と打混じて坐興に入らざるやう仕成せる者あれども。これ反りて。間違ひなして。その程を得たりといひ難し。斯く高振りたる人は。物毎に感通せる心の薄きよりて。唯その設けたる品を珍重せるばかりなり。大に主人の厚意を察せざるに當りてなり。たとへば。客としては。假初にも。充分喜を盡し。主人の設を受けて。その勞をこそ報ゆべし。そも。饗應の節。誤りて珍味を殘なく披露なし給へ。これを貪ぼり取るは。實に賤しき習なり。唯これを貪ぼらず。又これを輕んぜずして。隨分貴ふとみるから滿

足せる氣筋を主人に示すことそのその程を得たる賓客といいふべけん。

英將ウェリントン。曾て巴里斯に來り。同盟軍隊の總督たりし時。カムバサレ氏より招待を受て。その饗應に赴きしことありけり。カムバサレいハ。ナポレオン時代の名高き政事家にして。美食を好める人ふりき。斯くて。饗應の序で。主人英將に前にいと珍らしき品を具へ法ハ。その味ひ旨からんことを希がふと。いひける時。ウォータールーの英雄答へて曰く。至て美ふり。至て美なりとて。

我ハ何とも欲せざると。思ふに。その場に於いて。ウェリントンは。ブルチャー氏の巴里斯に來着するや。せざるにや。若し彼來着ふかりせば。軍議を如何定めんと。獨り思案をしふらめ。さきど。カムバサレは。此返答に程能きに仰天して。自分の又子を取落しは丶。嗚呼何にも欲せざとあれば。貴下ハ何故此席へ入らせられたるやと。叫んで言へり。

饗應濟みに。客間に入りて。婦人と物語りせんとする人ハ。預じめ用心して酒を多量に飲むこと

おかれ。大醉の餘り。自作の詩歌抜誇りて。詠吟數十遍と及ぶおもの失禮抜おひとと。古人ゐもとの例あり。

容ゐ對して。その過ちを飾ひおかゐとは。饗應主の爲に設くる一言にてこの篇を結ぶ。

舞踏

招待の引札い。舞踏を催ふひふ先ちて。七日より乃至十日までの間に前以て遣はそべし。引札の上ゐい。その家の内室の名を認むべし。その返答も亦異おることとおし。

息子。娘あ方へ遣いそゐは。引札三枚の中。一枚は。夫婦に當て。殘る二枚は。娘と息子とに當つべし。猶ほその外ふ逗留せる客あゐば。別に一枚遣いひおり。斯く三四枚もあひ引札は。一枚の封じ袋ゐ入ゐて封を付けそ。それ名當は。遣いそべき方の婦人の名を認むべし。又應否を答ふるには。その翌日又翌日の内に在ひべきおり。招待を斷はる節とてゐ。その日直と返答に及べば。舞踏ひ游戯ゐ心おき樣を示して。招待主の氣合を惡しくおひべし。

若し。招待とまをある家内。主人と分けて懇意なれば。數枚の引札を受るとも。返書一通にて事足るべし。只表向の付合なるか。又は禮厚き招待主なれば。引札の數に應じて。返書を認め遣はすべし。おしなへて。婦人男子一統より。返書各通遣はしをもて。穩やかなるやとに。

婦人より。男客を招待する時。未だその人を知らざるか。或は。その家の婦人に親しみなければ。言葉なく人を傳へて迎ふることもあるとに。斯くて。この場合に臨めば。その招待なく否むべからざ。又舞踏の夕方なれば。その催しなる先だちて早く至るべし。

化粧の間に入れば。銘々手袋なく着げべし。その色は白青黄などにて黒を用ひず。舞踏の席にある時は。手袋なく脱ぐことなしとされど。舞踏終りて夕飯の席に就けば。とまを取去ることなりとぞ。そのまゝにて食事をなすべし。大なる心得違ひなり。

待ちねたる夕飯時に至まば。銘々その婦人を撰らみ。とまと連を立ちて食臺に就くべし。食臺に就けば。婦人に心を配りて。その望みかなへる品なく

得せしめ。たかゝる後、再び舞踏の席に連れ歸るべし。

進物

進物い。交誼結び。交誼深くし。猶ほその情の盡さるを爲に贈る者なりとす。

朋友相互の贈物は。常に輕少なる品に止まるべし。若し大金の器誼贈るなら。正味の價ある者よりも。却りて手際よき細工物。或い珍らしき品位ある物を贈るゝはたかじ。取分け。婦人に大金の品を贈るい。麗相の至りと知るべし。これ此品もて。

媚を求め愛情誼買ふに疑あればなり。

若し贈物を遣してこれ誼褒むるに値へば。その意に背きて麗未なりと言ふべからず。人より贈られたる品物い。常みこゝを受け納め。その品些少なりとも。實意もて厚く禮を述ぶべし。そべて。品を納むる節。斯くあらば迷惑そべしなどの賤しき言葉を出いことなかれ。

餘程目上へなる人な。或い。さまで親しみなき貴人へ品を贈らんに。漁獵の獲物をもて相當なりとそ。

話言

話言は。人間交際の一大事なれば。必ず能くこれを習ふべし。これを習へば。その練熟にしたがひ猶は筆道に於るが如し。したがつて。物事はその言ひ振によりて。如何樣にもなるべければ。調子よく話言をなしたるこそ。實に人間に於て缺ぐべからざる者なり。

話言に達したるには。始終坐中に心を配るをもて第一とす。チヨルチル氏が云へるは。役者は舞臺の上に在りても。絶えず間なく。その場に所作に弓斷せざるをもて殊勝なりとせしは。今にも話言の上に心得べきことなり。斯る時に臨めば。その心を守ることと。その身を保つが如くなして。聊も怠たることなかるべし。さるによりて。心を守なく不束なるは。話言に達することと難しとす。そも話言の口傳は。人の言前を取り繕ふまあれば。名高き先生なりしも。平日人と交をなさで。唯書見にのみ耽る人ぞ。話言の面白き調子に至り難し。と。他人の口舌を顧みず。又一言の人を感動せしむることもなくして。獨り己の言前をのみむう

かしく述ぶるばかり。若しもさるべき人あらば。他人の言前を取持ちて。その氣に入り。利發の譽をも得べしとぞ。

若し。貴人の席上。或は。婦人の客間に在りて。素より相知らざる人に逢ふとも。話言をおして妨おしその節。兩人を紹介するに。主人他言を費やいに及ばず。唯雙方の身柄人品の程合により。交を結びて差支おきといふのみ。斯く見知らぬ人に話言をおさしめ。手重からぬ紹介故許るもとは。相共に面目ある場所に出逢へばなり。そも上に云へるは。その筋道に協へど。今世の習にては。後日必ず改めて。近附にあるべきことと定めたり。

諸業を營む者。寄合の席に集りて氣晴し。或は平日の骨折を忘れんとたる節。その職によりてその業體故語ることあるべし。新聞紙屋に政事故問ひ。時行病を醫者に聞き。兩替屋に金相場の高下を尋ね。學校の規則を教官に正すが如き。皆その人を厭はたむることあり。又人に尊卑の分ちあらば。己より目下なる人を好んで請持

ち。世話ふさんとして。その人とその業體を語るハ。好人物ハ仕業ふるゐが。通人ハしてこゝをふせば。交際ふ尊卑ふしといふ世態ハ疎く。學者ハて。他人の助力を乞いざるを貴とむ人情ハ戻をる者といふべし。

レイノルズ君ハ畫ハ名高き人ふりしが。曾て兩家の貴族より招待を受て。日曜日の朝早く尋問せしことあり。斯て。一方の貴族ふ至り。暫く待居たる頃。主人出來りて。いと丁寧らしく挨拶をふし。過分に取成しつゝ。是非拜顏せんが爲。平日の繁用を憚りて。態と今日の休暇ハ招待せしふれば。緩やかに話言を承け給はりたしと述べし後。頻に君の畫法を感賞して止まざ。その立去らんとする節にも。戸口まで送りたり。君此より直に他の貴族へ行しに。その應接禮儀の程を失ハざして。尊敬の意を盡せることゝ。猶ほ同輩の貴族ハ取扱ふが如くハて。その話言ハ世辭愛相の樣なく。又圖畫の評判ふも及ばざ。專ら古今の詩文。或ハ英雄豪傑の事跡ハ滯りなく語られるり。この貴族ふる者ハ即ちチェスタフィールド侯ふりき。君

この時思へらく。兩家の貴族共ゐ尊敬をなせど。その一は。唯口舌を飾るの外取るに足らざして。その一の候は。現に禮儀を行ふと。考へしまゝ。取分け滿悅しを歸りけり。この兩貴人の交を結ぶや。一は客の身柄を輕んじ。一は尊卑の隔おきとそ。人よく此に意を加ゐべしとに。

話言は獨り己の情といふ者かは。人の述べつる言をも靜に聽ゐらし。ミラボーの說に。凡そ世に求ある者は。己の知りたることをも知らざる人ゐ向ひて教を受ふとそ肝要にて。その追從は。立身の近道おゐ。中ゐも追從ゐ取るべきは。人の話言を聽くゝありといへり。ラ。ブルイエール云く。話言の才は。自から多辯を示さんより。人の言前ゐ聞くゐたかど。人若し話言を述べて自得ゐる時は。必ずその聞人まで深くこゝを愛ゐる者おり。又人の情として他人の說ゐ感服せざる者おれば。多辯せざるの愛を受くるゐたかど。又教を人ゐ受んよりは。自から授げて人に誇らんとゐる者おり。そべて快樂は。人を喜ばたむるゐありと。己の才智を他人ゐ示さんとゐるは。その理おが

ら。先づ他人の才智を感服せるこそ第一なれ。堪忍は教道の善行。交際の器械なれて。人の話言を細やかに聽き。客を親しく待ちて倦ざるは。富貴を求むるに缺ぐべからざる者なり。

響應の席。或は。夜話の坐中なれ。若し外國の人ありて。我國語を通ぜざる者を逢へば。始終その國語むて話言をるを禮なりとせ。にべて。いと親しき朋友の前にても。坐中殘らず知り得たる語言なれらでは。何事も語るべからず。とを語れば咽く樣に似て心地よからず。

寄合の席にたりては。その中の一人に向ひて。彼一件は如何なりしやなどゝ尋ねつゝ。他人を憚からずして。内密の事を語ることなかれ。とも他客を餘計なりとなれ仕業なればなり。されど。若し箇樣なる問答をなれに及べば。その事柄に差支なきうへ。必ず他客なれも。事の次第を告ぐべきなり。

新客入來の節。坐中の話言。その端を改むるを暇なければ。必ず新客を對して。又事柄の次第を告ぐべし。

坐中ニ見知らぬ人あれば。能く慎しみて諷言を出さず。禁句を吐くことなかるべし。譬へば首繩の儀を語るハ。父親の絞罪を受つる息子に對して禁句なるが如し。さるに由りて。話言ニ達そるにハ。善く坐客の由來を知り得るに在りとして。話言の席にハ。男子たるの威光を忘れ。物ごとたとやかにして婦人に如く仕成ひとそ肝要なれ。最早前文ニも述べし廉。今又此ニ相似たる心得方あり。即ハち話言をなす時ハ。餘り辯舌を振ふことなかるべし。ひとべて。人は各我身を愛そる者

なれば。面白き話言あるを。若しも多辯に過ぎなば。聞く者の自愛に逆ひて感服ひることなからしめ。又洒落とても止む間なければ。人ニ厭はるゝことと少からず。そも。辯者ニハ氣合よき友たりといへど。倦み疲るゝ者なりとひ。モンテイギと名ける婦人の說ニ。辯者のいと賤しむべきことハ。坐中ニて笑を受る者に異ならず。そも。話言の大事ハ。首尾狂るハず。物毎ニ釣合あることと四人紙牌の游戲ニ於るが如し。若し一人の手より二つ紋ある金剛札を投げ出せば。その次の者隨ひ

て他の金剛札を取合いをを常とおそ。その手並如何程よけをばとて。俄ゑ王像の心臓札をその場に出をことになるを。話言の上にても。獨ア辯者は勝を好むは。見苦しきことなりといへり。

人に對して話言いる時い。始終目を配りてそは方を見守るべし又坐客多けをば。折ふし。話言は趣を易へつゝ。坐中順番ゑ及ぼして。唯一人を慰めざるを善とを。是れセリダン氏の曾て愛を人ゑ受たる奥義なり。

何事ゑ親らぢ。疑問をべからぢ。疑問い先づ尊大は風波示し。且つそは返答波ゑれゑ臨みて。甚だ不都合ふることあをばなり。曾て一人は婦女。話言は席に在りて。彼の醫師い。何は科ゑるやと尋ねしが。そは醫師實ゑ產科の先生なりき。

當時は新聞より近年は事情をとへ善くことをゑ通ぢるい。話言に缺ぐべからぢる者にして。此等の事に疎きい。又その身の不便利なりと知りゑべし。

寄合は席ゑ在りていい。絶えて古人は語波引き用ふることをかをとど。若し頑なる學者と爭そ

ひ論ずるに及べば。やむごとなく。故實を擧げて。その氣先を取鎭づむることあり。斯る時よりは。その學者は平日よりいと感服したる古人を撰らび。同樣の話し振りて。一二は名言を吐きて。その推し立つる說を破るべし。尙もその意を滿たざることあれど。多くは魂消つゝ爭を息むるに至るべければ。口論は餘り。手出しなどに及ぶことなかるべし。

寄合席に在りて。口舌は戰ある時。平素用ゐべき武器は。改まらざる場處なりても。必ず自分の理前

理守りて。未練の振舞ゐ至らざれば常とす。されど。中には。自分の理前を推して。却りて賄賂もて。その相手の目を昧ましんとしたる者あり。その所持の武器は。追從と名ける一物なり。又下賤の者ならで。高貴なる人なりとの武器を用ふることあり。そは權威ふ追從を加へて。舌戰の勝を取ふことと。猶ほ毒藥を利劍に塗みりて實戰に用ふるが如し。

追從の力は。時とおく處とおく。勝を獲る者なり。

ダナエは勝武者とへとれに辟易す。況して餘人

はゞ刃向ひ得んや。役所。陣中。寺院に分ちなく。又賢しときも。愚かなるも。皆とゝの敵に敗られて降參するなり。とゝばば。人として追從に巧なる者は。その人を動かしに力。輕んぜべらざることと明かなり。

唯人を譽むるのみ。追從とはいひ難し。人に譽詞を受るも亦追從なり。

人に前に。他客を譽むることゝ遠慮にべし。絲竹に道を知りたる婦人に向ひても。他の婦人の游藝に妙へなることゝを語るべからず。

とゝ。客に對してその親友を譽むることもありけり。若し。そのゝ客に障いりなき藝能なゝば。いつも妨げあるを見き。客も多くは同意して拒むことなきものなり。

追從ふ醉ふべき者は。獨り婦人にて。男子はさまでにあらじとなれば。こゝを誤なり。いづれも醉はざるにはあらねど。婦人は口舌を喜び。男子はその心術に動くことの異なるのみ。

追從は固より人を動らにに用ひて。その功著るしけれど。多くば己を防ぐ爲に用ふる故常とゝ。

凡そ人の無禮は愛相よくこれを勝ち人よりの難題は追從もてこれを免るゝことあり。ナポレヲン曾てタレーランに向ひて足下元銀の取引によて折節不正の利益を營むと告る者あるは何そやと糺問せしかば。タレーラン答ふるよ。こは恐らくば間違おらんといへり。されど如何なる手段によて斯く莫大の金銀を設々たるやとあれば。殿下大統領の高位に昇りし前日に當りて割合よく元銀を買ひ集めしが。實はその翌日賣たるに由りと答へにけり。

もべて婦人と話言をかはしは常に禮儀の重ならざるをもて善き仕來とおせば。年稚き女の伊達にしてあどおきは唯當時流行の衣裳より。四方山の風説おどを語るに止まるど。又外ふる心得べきことそありける。そは婦人多きが中に年の稍老けたる。分けて嫁しづきたる。又年稚き女にさへ。發明物知りの譽を得んと望む者おり。さるによりて。話言の節は。禮儀おごそかに取扱ひて。その自愛の心を養はんには。深き意味のそもと心に定め得べき事柄を告げ示ひべし。打寄り

たる婦人ありて。美はしき草花を詠むるよ逢へば。猶ほひときい珍らからふる算術の奥義を述べて。二重に曲りたる弧線の點を求むるに新法ありと告るよそ。婦人はふと花の色香を品定めふさんや。さもば。三十に近き婦人に專ハらあだふることを語るは。その心ふらふふまじ。

母親の前ふい。子供の事を語りがし。婦人の情じしそ。その育て方。子供の生ひ立ちを聞くにつけて。倦み勞れざる者なり。

子供多き方に至れば。殊よ心得て。如才ふく愛相

を仕向けべし。

婦人の用ふる熟語を知らざもば。話言に及び難し。さるよりて。一通りとれを學ぶへきことふり。にべて。婦人ハ。イママデニ。イッマデモ。の如き言葉を用ふる者ふるが。正しき字引よりて。その意味を解きふば。大ふる取違ありとに。

婦人に對して。その眉目の艶ふる。才のはたらきふどをいつまでふ語るハ。宜しからざ。人の知るよりふ。婦人ハ深くその身よ知る者ふり。

座中に婦人の愛ひべき者ありける時。とりと語

らひて取持つことはあれど。折節他の婦人にも氣を配りて愛相はべし。斯る時。その深切を思ひ知る者は。獨り己の愛をされ婦人に止まれべし。己の藝能は誇るに及ばず。人の才智は揚れに過ぎず。廣く世間の交際かさん人は。物毎に中道を得て。過不及なきこそ肝要なり。

話言の間。輕きに過れば。重きに過れば。皆禮儀の程度失ひて。その輕きは。騒がしく。その重きは。淋しげなり。

世に驚くべき者なしといふ。虛無學者流の教なれ

が。今の世男子の交を結ぶに用ひて法となつゝ。話言の間に在りてもそなて。物毎に驚き怪しまざれば。樣務むべし。されど。婦人に對ひれ時は。事かいりて或は驚き怪しみ。或は喜び憤らざれば。その信用を取ることと難し。

衆人の前に在りて人と口論をべからざれば。人の說を聞きて同意なし難き時は。一言も吐くことなし。又小事なれば。唯同意をるとも妨げざ。若し別に異存あれば。こゝを眼の當りに述べざして同意せざるべし。

凡そ物事拔聞紛さんとなれば。指してこれを問ふべからざ。但その事柄を述べて。人の思へるまに答ふるを待つべし。さるふよりて。今日御兄弟は如何と尋ぬるさへ憚かりて。御兄弟は大分御全快ならんといふ拔よしとぞ。

婦人よい。何事も問ふことなかれ。

英語の話言ある節。佛語を代へ用ふるい。殊よあしき習ひなり。來客を挨拶する時「ボムシュール」（佛語好き天氣）を使ふぞ。又返詞をなす毎に「ヴォロンテール」（佛語さよふ）を用ふることとなし。寄合席に在りてい。偏よりて己が好める話言をなさざることを俗よ株をいふと唱へて。聞く者皆厭ふることなし。中よも親切よ過ぎる人い。株をいへる者よ附けとみつい。尚ほこれを殖やさしめて。坐客の興拔添ふる者あり。よくこれ拔演しむべし。

話言の間俚諺を用ひぞ又正しからざる俗語いそべて慎めがし。こい古人の戒しむる所よて。心得違ある時はいと賤しみ惡くむべき者ぞ。

寄合に赴むかんとする時。先づその席ふて催すべき話言の種を設け置き。又その始むる樣をも

整ふるとそ勝利ふ。そのうへ粗話言の大意に渉りて。入り言葉はいと短く面白き事柄を四つ五つ程撰らびて。こゝを巨細に心に留め。猶ほ二三の妙句名言をも。前もつて用意あれべし。されど。度を過ぎて話言に仕組あれい。反りて大ま害ありとも。そべて。長き事柄を諳らんじてとれを寄合席と述ぶれば。自然嚴重ま過ぎて話言の程を失ひ。噺會の掟をも守らざれま近し。又話言を快よくそれに缺くべからざれ者い。頓智の習ふれが。長き話言を諳らんそれい。此善き習ひ妨ぐれ者ふりとに。同じ人に對して同じ話言を重ねて述べそ。又佳句名言ありとも。慎しみて再たびこゝを語らそ。

リチアード。シアープい。談家シアープの異名を受し人なゝば。常に一冊の見參帳を携へて。人ま見參に入る折柄。新說奇談を語る毎ま。その家名と。席上ま ありつる客の名をも記し置きけり。又有名なるバブダッチットン氏い。珍客の來る毎ま。己が作りたる新話の稿本を出して讀み聞らさしむるをも常とふせしが。又同じ客に對して。同じ話言を

重ねて聞かさんめざるは。その記臆の強きに由りてなり。

いと麤末なる寄合席にても。一通りの學藝を心得たる男子は。その名譽榮耀かをことを望み難し。次べて。物事の深理を求めんより。却りてその事實に通ずべし。さもば。高上なる學術は。こをを極むるに及ばざれど。古今の曆史。言行錄を知り。圖畫。雕刻。音樂等の諸藝に達すれば。その益少からざるべし。

入を言葉を程よく述べい。聞く者をとりて。いと面白きはどを手易からぎ。その言葉を催はしをを。あてやかにして前話の意に戻らぎ。且つ坐客の氣にも應じて。話言の筋と調子を失はざれやう心得べし。おしなべて。入れ言葉は。手短をおかしくて。流れ〳〵が如くあれべし。又新奇なをを好めど。穿ち過ぎたをい惡し。

舞踏の席。或い游歩の時などをふを話言は。その調子急速をして。人の氣合も忙がいしければ。唯事柄の精味をのみ述べて。その委細い省き除くべし。されど場席をより時宜に應ぎをば。これを

細やかに述ぶれども妨げざ。但煩はしからざれ
ども長しとは。又實事の始末は。有體に告ぐるを
常とはいまどその時の主意は。忘るゝことなかる
べし。

廣く諸國に游歷しある人が身は上へ噺坂述ぶ
れに。遠慮もせざ。又多辯ならざしてその中坂得
ずとと甚だ難し。そも。游歷につけて面白き噺多
ければ。人皆樂みて聞んと欲れによりて。とまを述
べてその意に滿たしむべけれど。それ辯に任
せてよき程坂失ふべからざ。さまば。人よりは尋

あ原毎ふ。その身乃實錄を舉げて答ふれに。我曾
てエザットに在し時と說き始じむれは。宜しから
ざ。

滑稽噺は。はべて人乃笑草とある者もへ。長ゐに
過れば。聞く者倦み疲れゝことも多し。さるにより
て。常並の話言ふ氣輕く面白ゐ文句を。そちこち
よ入れゝは。反てて勝れりと欲。こまを設げざして
たまゝ成れ者ゐまば。聞く者の氣ふ觸まざして。
こまを諫め。或はそれ心坂勞せざして。笑はしむ
れ者ゐり。

洒落噺は。最早廢物となりて。これを用ふる習は。淺はかにして厭ふべきことなり。人これを名けて馬鹿口といふに至れり。そも。洒落噺は。いと愚なる人の能くなる所にて。いつも物知りたる人を迷はしめ。その品柄を落さんとて用ふること多し。この外。洒落噺を取る所もあれど。今はにべて棄てられたり。

對話の間。我尊君。或は我尊婦などの句は用ふべからず。

凡そ。事の成るは。人に對して唯他人を噂するに在るのみとは。ラヴロル氏の得意の格言なりき。

をゝなどゝこれを實事を試みて察しつゝ。今新に反對の格言を設けなば。事の成るは。人に對して聊も他人を噂そべからずと定めん。そも。人を噂する言前は。聞者の耳を喜しむるゝ。その心にはい快からざる者なれば。その言前を述べる者を威ゞして遠ざくべし。又人の是非を噂する者は。評判師。惡る口利の名を受て。人その言前を直と打ち消し。或は斯やうなる噺振を改めたむることあるべし。されば。若し彼の名高きカンドル氏の如

き多辯なる婦人と對話をなさば。鋭き辯舌を振ひて言ひ拒せぎつゝ。相手にも勝るべき程の口を利きて。後日己を他人に謗らば。却りてその身に害あらんことを示ひべし。

世上の交は。人に從ひ世と同くべし。人に背きて世と異なれば。戒しむべきことなり。夫れ世の中は戲場にして。人皆衣裳を飾り。華鬘を蒙むらざれば。とて舞臺に登れる者なし。されば。人の實意本心は。各その身内の者。殊に親しき朋友にのみ表を納め置きて。世間に出ることあれば。常に人と違はぬ。又何事をも爭はざる。所謂快よき人とは。人に同意する者を指していふなり。

心得

人に對して禮儀を行ふ時。それ人に讓るに逢へば。その意に任せべき程合を見ることを頗る難し。通例の定は。若しその人唯一度これを讓る時は。それ厚意に當らぬして。唯平日の挨拶と見成すべし。されど。二度に及び。且つ實意もてこれを讓らば。その願ふ所なりと察しつゝ。一禮を述べて。その讓りを受くべし。譬へば人の家に至りて。

そは席よありあふ人を尊敬せんとて冠りし帽子を脱ぎ。或は立ちしまゝある時。その人ときに坐を與へ。又は冠られよと請へば。初發の挨拶ハ。ときを受けざして。二度よ及べば。そは意よ從ふべし。ときそは人は意を常禮より重んじて。然れるがもち。畧儀よハ似たれど。却りて手厚き禮なりとに。

戲場。書畫院。博覽會(ピクチュアガリレイ　エギシビヨンプレース)などの場所よ入らんとする時。身柄ある婦人のそは内よある扨見れば。未だ知らざる者ありとも。直と帽子扨脱ぎて。その前よ接拶ときべきあり。

止の如き場所よある時。見物人皆男子なれば。その中の長者。若し帽子を脱ぎてありければ。又その身よんこときを脱ぎ去りて。その場の例よ從ふべし。又別間よ行きて。尊むべき人と對話せんとする時ハ。先づ己の帽子を脱ぎ去りぬ。殊よ少き者ハときを心得べし。

いと親しき友と交るときへ。稍遠慮して言葉の數多ならざるを良しとす。猶ほ分けて。平日の交際ハ。言葉を慎しみ。己が心底を人よ穿ち知らる

ることなく。又人の存意をも探らんと企てざるべし。たゞ。彼を親しむことは。交の爲めに大なる害なりとぞ。

嘶會に招待を受けて家族と共にそれ席へ赴むけば。内間同知互に話言をなすべからざ他人に事を人に告るに臨めば。常にその名を呼ぶに。何某氏といふべし。唯何君とのみ呼べば。餘り狎れしくして聞苦るし。

朝見舞をなす者は。その脱ぎたる帽子を携へて廣間に置き。夕見舞。或は。饗應に赴むく時は。書院の内に帽子を置くべし。

夜會の席にありて。その家の婦人より歌を所望（イーヴニングパーティー）さるゝ時。兼ねて心得あれば。その意に從ふべし。さもなくば。餘人の所望にては。常に歌ふことなかるべし。若しその身にありて。能く歌はざるか。或はことを好まざれば。直ちに實意もてその由を告げ知らしめ。早く坐客の待心を絶つべし。又一二曲ふ歌へば。その次は他客に讓るべしとぞ。

人の歌ひ。或は。音曲を調ぶる時。その身にはさまことをを嗜まざるとも。靜に打守りて聞ねがしと

の時話言などをいひ。他客を妨げ。主人をいハ無禮なて。又歌ひ調べつる者を憚からざる仕業なり。」書院。或ハ物讀場（リーディングルーム）の如き廣間なあるもの。聲高な語り。且つ笑ひて人を妨ぐべからず。音樂場（ソンギング）。又ハ歌會（ソング）の席ふ連なれば。その所作のありける間。靜ふ聽聞（きき）べきなり。その身に音曲の趣を知らざるもばとて。他人の興を破ぶる様謂もなきぞかし。

婦人と共ふ歌會の席ふ赴むく時ハ。その身先づ内間ふ入りて。連れ來りし婦人の爲ふ。その坐を設け置くべし。

客間ふありて話言をなる時ハ。聲の調子常ふ柔和ふるべくして。殊更ふ聲を落さず。さりとて又高きふ過ぎず。唯少しく平日の調子よりも低くあるべし。

打續きて對話をなる節。たゞ相手の名をその間ふ入れてとれを呼ぶハ。田舍の習ふて。餘り狎もくしけもば。とも慎むべし。

婦人と連も立ちて段階子を登る時ハ。その身ともふ先だち。又降る節ハ。これふ後るゝなり。

婦人ふ伴ひて市中を歩む時。若し往來籠（こ）み合ひ。

或ハ他の譯柄ヨテ止むを得ざ一人づゝ通行ハ
べき折ふ逢へば常ヨ先だちてこゝを導くべし。
他人ハ事を語り又ハ人と對話ハる節そ乃人を
呼ぶヨハ必ずそハ名ハ一字を取らずして具を
ヨこゝ場述べ盡ハべし又略儀ふて己が妻ハ名
人場に告るハ殊に聞き苦るし
人を見舞ひ或ハ嘶會ハ席にある時そハ家の婦
人坐場立ちて客の前場過る毎ヨ男客ハそべてそ
の坐を立つをふて古來より禮儀の缺くべから
ざることゝふせしが乃習今ヨふ猶ハ存して

年老たる人ハこゝを重んじ又年の若きふ四十
年の前つゝをに行ハれたる禮儀場忘れざる人
ハこゝ場守る者少からず誠ヨ善き習ふゝ
ば稍今ふふこれ場留むるヨ足りて以前の類ひ
ヨハあらざるゝども其場の宜しきを見て
を計らひつゝ尚ハ用ふる所ありとハこゝば家
内の婦人手近ある坐を立つ時殊ふその立つヨ
先だちて己ゝ話言をふしつゝあらば必ずその
身ふ坐場立つべし。こゝゝど若しその婦人客間の
彼方ヨ在るか又ハ己れ他人と語りふがらある

時。この古禮を行はんとして坐を立つゝ。今日交際の通例に背きて。禮數に泥むといはゞべし。」婦人の手を握らんとする時。手袋のまゝなるを見ば。己が手袋は故さらに脱き去るべしかるべし。されど。それ脱ぎ去りたるを見ば。又同じ心得ありたし。

通例に取遣に常式を守らざるは。にべて無禮なりと知るべし。譬へば招待狀。或は。それ返書の中に常からぬ文句を用ふる或禁ぜるが如し。されば何君より某君に來臨を請ふといひ。隨ふて。某君は何君に招待を受けしといふが如き古體は。これを改むべからず。

婦人に腕を引れつゝ游歩にる乃間。道を曲ぐる毎に。その腕を抜き取りて自から外側へ廻り行かんとにるは宜しからず。にべて。斯樣なる仕業は。故さら常式を守るに意を示さんとにるなり。常にこれを慎めかし。

男禮下篇終

上篇　誤脫改正の分

一葉裏第七行　用ゆる人の下よりぞを加ふ

同　第九行　かかるべしのしをきよ改む

二葉表第五行　服制を設けるのけをくよ作る

五葉表第六行　褒むるのるを省く

六葉表第五行　おろしくのおをよ作る

十二葉表第九行　一枚の札の字の上よ手を加ふ

下篇　誤脫改正の分

廿一葉表第三行　やむごとのごをこよ作る四十一葉裏第一行も同ト

廿六葉表第一行　無解を無氣よ改む

同　第二行　勸めるのめをむよ改む

廿七葉表第四行　滿れぱのれの上よてを加ふ

三十九葉裏第七行　肝要かをの下よとを加ふ

四十六葉裏第九行　「ヴオロンテール」を「ヴオロンチエー」よ改め佛語さよふをさやうよ改む

五十一葉表第六行　述べるのべの下よつを加ふ

五十五葉裏第五行　妻の名の下人をいと人の誤なり

政

花之可觀者。以鮮明爛發爲然乎。膏雨潤。和風動。玉蕊粉蕚半含而未破開。唯此時對之。神骨飄々。忘我爲吾以樂。顧古今世界之事亦有類於此焉。嗟夫宇內五洲廣且大矣。其間有教化律令能浹人心髓而國豐民厚者也。是謂之盛。孰不欽慕而適從。然其爲極也。竟流於安逸驕虐而已猶暴風一擊花碎葉墜而委地也。故亞非利加衰而亞細亞興矣。亞細亞又一變而致現今歐羅巴之盛。安知其所以爲盛者數十歲後不更轉爲米利堅或澳大利亞之盛也乎哉。

是與花葉朽腐化土土復生花何異。西儒有言。文明之極。陷乎野蠻。又曰。民情深厚。以半開之國爲最。然則。今譯解此書男禮者。其意蓋在欲移西洋禮文之土而養東方宣明之花耳。明治八年暮春。高良二識。

官許

明治八年第三月三十日

二千五百三十五年

第四月十七日 新鐫